

Title	市村和子氏による「子どもの思いや願いを生かした授業づくり：生活科、国語科を中心に」報告（「〈児童〉における総合人間学の試み」第2回研究会）
Author(s)	田澤，薫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3 : 39-44
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4961
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

「〈児童〉における総合人間学の試み」第2回研究会 市村和子氏による「子どもの思いや願いを生かした 授業づくり—生活科、国語科を中心に—」報告

2013年度2回目の「〈児童〉における総合人間学の試み」研究会が、2014年1月13日に開催された。今回は、児童学科の市村和子氏が「子どもの思いや願いを生かした授業づくり—生活科、国語科を中心に—」と題してご報告くださった。市村氏は、埼玉県で長く小学校教諭として勤め、とくに国語科・生活科の授業研究について豊かな成果をもっておられる。今回は、25年前の実践を振り返り、教科として導入された当初の「生活科」における取り組みと、生活科の成果を他教科に活かすことをねらいとした高学年の「国語科」の実践事例を通して、そこから得られた小学校の授業づくりについて論じられた。小学校現場での実践から積み上げられた市村氏の児童観や指導観が、まさに児童学における子ども理解に即したものであったことに参会者一同が大いに気づかされた研究会となった。

以下は、報告内容の概要である。

1. 「思いや願いを生かした授業づくり」の土台

生活科が教科として新設された時期に1年生を担当することから生活科に関わり始めることとなった市村氏は、国語科教育者として名高い大村はま先生を仰ぎつつ、授業で力を付けることを自分に課していた国語科教師だった。「生活読み」の実践で知られた井上敏夫先生、「七変化の教式」で知られた芦田恵之助先生の直弟子に師事し、嘱望されて多くの研究授業の機会を得ながら、真直ぐに国語科教育の道を歩んでいた。

2. 生活科との出会い

1992年度からの生活科全面実施を前にした1988年度、市村氏の勤務校が埼玉県の県立北教育センターの研究協力学校となり生活科の委嘱を受けた。その翌年度、思いがけず1年生の担任となること

で、市村氏自身が生活科の教科研究に取り組むことになった。

当時は生活科の教科書がなかっただけでなく、参考になる授業実践もなく、北教育センターから示された簡単な授業プランと文部省から出された『生活科』（頒布価格50円）の指導要領解説書のみが頼りだった。

1年生の二つ目の単元は「がっこうたんけん」である。「がっこうたんけん」を通して、市村氏は、生活科のイメージが少し変わる印象を受けたという。従来の1年生の「がっこうたんけん」は社会科に位置づき、教師が先頭に立って児童を連れて校舎の中や校庭を回った。それはそれで児童に興味のある楽しい経験となったが、子ども自らが学校探検への思いや願い、必要性を感じる姿は見られなかった。教師が連れて歩くのに「探検」と称することにも矛盾を感じずにはいられなかった。

生活科における「がっこうたんけん」は、「自分たちが毎日お世話になっている通学班の班長さんの教室に行きたい」という思いからスタートし、段ボールで作った探検列車に乗って、子どもたちだけで学校中を探検する活動として実施した。担任の不安をよそに子どもたちの満足は大きく、自分たちの見落としに気づくと再度「たんけん」に行きたがり交渉しに来る姿が見られた。子どもの思いを大事にして子ども自らの活動中心に展開していくことで意欲が生まれることが実感でき、生活科も悪いものではないと思い始めた。

しかし、従来の学校教育では「子ども中心」「初めに子どもありき」という考え方は一般的でなく、児童が主役であって教師は一步退いて子どもたちを支援する生活科の教授姿勢は他の学年の教師からは認容されにくかった。当時は、名人芸といわれる高い指導技術で子どもたちの学力を向上させる方法が高く評価されており、子どもの思いや願

いへの視点はなかった。生活科は、他学年や他教科からの批判と闘いながら確立されていった。

3. 「思いや願い」の考え方

文部省から出された指導書を繙くと、最初の平成元年版には「思いや願い」という言葉は見られない。ところが10年後の平成11年に出された改訂版には「思いや願い」が散見され、第5章第2節には「児童の思いや願いを育てる」という項目まで立てられている。生活科のねらいそのものが定まっていなかった事情が窺われる。

その一方で、埼玉県教育委員会に在職後に文部科学省の最初の生活科教科調査官、視学官を歴任した嶋野道弘先生をはじめ、県立北教育センターの指導主事から熱心な指導を受ける機会に恵まれた。従来の教科指導にはなじまない「子どもをよく見なさい」「じっと待ちなさい」「子どもには子どもの論理がある」という教員指導が印象的であったが、これまでも子どもの反応を見ながら授業を進めてきた自負があり、具体的にどこが違うのか、混乱や迷いのさなかにあった。

4. 子どもの思いや願いに触れる

当時は毎日、朝の職員打ち合わせがあった。(現在は防犯上の理由から、児童の下校後に打ち合わせを行う学校が多い) 打ち合わせを終え、職員室から1年生の教室に向かって学年の教員が連れ立って歩いていくと、どの教室も、教室から廊下に子どもたちが出たり入ったりしワイワイやりながら教師を見つけるとまた教室に入っていくというような光景だった。その度に「だめでしょう、椅子に座ってなくては。自習をしている約束でしょ」と言って座らせるものの、翌日にはまた同じ状況が繰り返された。ある日、最後まで出たり入ったりしていた児童に「コウちゃん、クンちゃん、どうしてそんなに出入りしているの」と尋ねたところ、2人は本当にうれしそうに「ふふふ」と笑って、「あのね。先生が来るのが待ち遠しかっ

たの」と答えた。その瞬間、市村氏は時間が止まったような衝撃を覚えた。「ああ、しからなくてよかった」と実感するとともに、「ありがとう。待っててくれてとってもうれしい。でもね、先生はお教室で座って待っててくれたら、もっともつとうれしくなっちゃうんだよ」と伝えて頭をなでたところ、翌日から2人は教室で着席して待つようになった。

この経験は、都立教育研究所の西君子先生の講演で聞いた「子どものどんな言動にも、その子なりの真実がある」という学びを想起させ、子どもの思いや願いにふれた実感として残った。

5. 思いや願いを生かした生活科の実践

「がっこうたんけん」で飼育小屋にウサギのを発見した子どもたちは、「先生、早くウサギさんと遊びたい」と毎日せきたてた。「そうね、じゃあウサギさんと何して遊ぶの」と尋ねると、「ウサギさんとかけっこをしたい」「一緒にピョンピョン跳びはねて遊びたい」「ウサギさんを抱っこしたい」という返答のなかで、「先生、私ね、ウサギさんに遊ぶものを作ってやりたい」という声が起こり、「ほくも作りたい」「私も作りたい」と周囲の支持を得るようになった。そして、ウサギの遊び道具作りが始まった。

どの子も作りながら「ウサギさん、きっと喜ぶ」と信じて嬉しそうだったが、1人浮かない顔をしてボーッとしている子どもがいた。図工が大好きで4月生まれのリーダー格の子どもがほんやりして作業に参加しない姿を不思議に思いながら見守っていたところ、しばらくして「先生、ほくは1人で作りたい」と言いきた。本人は「あのね、先生、ほくはね本当はロボットが作りたい。ウサギさんは絶対ほくの作ったロボットを喜ぶと思うんだ」という。ロボットはできたがウサギは寄って来ず、その子どもは考えて考えて、考え抜いてロボットのおへそにニンジンをつけた。これは見事に的中し、ウサギは大喜びでロボットに飛びついた。「先生、見て、見て。ウサギさんは、ほくの

作ったロボットが大好きみたい」という声が、飼育小屋いっぱいに響いたという。

生活科の中で、教師は子どもが見えなくてはいいと言われるが、教師が支援する際にはその子どもの行為の解説ができることが前提になるだろう。そのためには、日々の行動観察を基本とし、子どもの実態を知っていることが鍵になることを改めて実感した。1人ひとりの子どもの興味や関心は異なり学習のペースも差があるので、教師は1人ひとりに思いを寄せて関わってその子の個性を大事に育てていく姿勢が重要である。上記の例も、担任がこの児童は物を作ることが好きははずだ、それなのに何でここではボーッとしているのだろう、自分の思いがあるかもしれない、それを実現させたらどうなるだろうと気づき、活動になって児童を生かすことができたのではないか。

活動を中心とした学習では1人ひとりが主役になれば、生活科で重視した直接体験は子どもたちに大きな喜びや自信を与えて新しいことへ挑戦する心も育てていくと実感した。一方、今まで見えなかった問題点も見えるようになった。子どもたちの思いや願いに寄り添うとは、そのときどきに子どもたちの思いや願いをかなえているだけでよいのだろうか。教師が組み立てた活動の流れの中で、泳がせていたにすぎないのではないか。教育課程や年間指導計画の枠内であっても、子ども自らが活動そのものを生み出していくような、そういう子どもたちに育てたいと考えるようになった。

「活動までも作り出す子どもたち」というねらいは、「雨の日にたんけんしよう」という単元で小さな芽を出し、思いや願いから導かれた活動の流れができた。雨の日に探検すれば雨を喜ぶカエルやカタツムリなど小動物がたくさん見つかるに違いない、捕まえて飼いたいという願いで、子どもたちは意気込んで雨の日の探検に出掛け、期待を裏切られて帰ってきた。「先生、せっかくカエルを見つけたのに、傘を持ってたから捕れなかった。捕

まえられなかったの」、「先生、私はスカートがぬれちゃった」、「先生、僕はね、靴下までびっちゃりになって気持ち悪い」という残念な経験をした。そのうち、「傘がなかったら、あのカエルを捕まえたのに」、「ぬれないスカートがあったらいいのに」と言い始め、子どもたちは考えて、「傘が邪魔なら、かっぱを着ていけばいいじゃない。布のスカートはぬれるけど、ビニールのスカートならぬれないよ」、「そうだよ。ビニールの靴下があれば、水たまりがあってもへっちゃらだよ」と考えが進み、ついには自分たちで作ろうという流れになった。早速、雨具作りの活動が始まって色とりどりのビニール袋で思い思いの雨具が出来上がり、この自慢の雨具を身に付けて、子どもたちは元気いっぱい2度目の雨の日の探検に出掛けていった。

このように子どもたちの思いや願いを活動へ結び付けることができたようになった頃、ハプニングが起きた。学級では5月から野菜の栽培活動に取り組んでいたが、夏休み中に校舎の一部改築工事が始まり、ある日突然、野菜畑がその工事の塀の向こうに消えてしまった。水やりもできない状況を担任も知らされておらず、担任として管理職に抗議しに行ったものの「残念だったね」の一言で済まされ、学校内で生活科が重視されていない状況を思い知らされることになった。2学期、2階にあった2年生の教室から、うらめしそうに枯れていく野菜の様子を見続けた子どもたちは、「先生、野菜さんがかわいそうだよ。野菜さんのために何かしてあげようよ。よく見て、先生。サツマイモはまだ生きているよ。工事のおじさんに道具を置かないでって頼もうか。ねえ、みんなで話し合わない?」と言いだし、話し合いが始まった。

考えて、考えて、考え抜いた結果、だめになってしまった野菜のためには、「野さいさんさようならの会」を開き、5月に一生懸命野菜を育てようと決めた心は変わらないから、秋まき野菜を調べてもう1回野菜作りに挑戦することを決め、さらに、「何とか生き残っているサツマイモのために、

サツマイモ畑の上にはもうこれ以上道具を置かないでって頼みたい。そして、サツマイモが実ったら掘らせてほしい。それを先生、誰に頼めばいいの」と言い出し、「工事の監督さんに手紙を書こう」と文面を考えて、工事の監督さん宛てに下記の手紙を書いて渡すことをやってのけた。

「こうじのおじさん こんにちは。わたし（ぼく）たちは、二年四組です。

おいそがしいところ すみませんが おねがい、あります。

一学きに 二年生みんなでいろいろな野さいや花のたねをまきました。でも こうじがはじまってから、水まきができなくなって ほとんどかれてしまいました。さつまいもだけが、どうにか生きのびています。なので さつまいもの上に、いろいろものをおかないで下さい。そして、十月中に、ひまな時があったら、さつまいもをほらせて下さい。

どうぞよろしくおねがいます。

十月一日

二年四組のみんなより」

その甲斐があり、工事監督のご厚意で10月11日にサツマイモ掘りは実現した。このころから国語で学習した「スイミー」を子どもたちは大好きになり、特に「スイミーはかんがえた。いろいろかんがえた。うんとかんがえた」（レオ・レオニ作 谷川俊太郎訳）という言葉に共感し、活動することも考えることも大好きな子どもたちへと成長していった。

3学期には、単元「冬を楽しくすごそう」で、まず校庭を回って木々が小さな固い芽を付けていることを見つけた。自然界では既に春を待つ準備をしていることに感動した子どもたちは、自分たちの生活の中にも春を迎えるための行事がないかとカレンダーをよく見て「節分」を見つけた。子どもたちの思いは、自分たちの豆まきをしたいという心の高まりになり、「おにをおい出せ、まめまき集会」が計画された。

プログラムには「げきをする」があり、自分たちで力を合わせれば何でもできると信じるようになった子どもたちは、劇もストーリーを作って演じたいと主張した。2年生のやる気と自信に驚きながら見守っていたところ、鬼の歌を作詞作曲し、2グループに分かれて赤鬼・青鬼を製作し、いよいよ劇製作にかかった場面でリーダー格の児童のテンポの速さについていけない児童が幾人かいることが気になった。まめまき集会をやりたい思いや願いはどの子も同じなのに、と考え、彼ら数人だけを集め、「みんなは黙っていてあんまりしゃべらないよね。でも、いつもやってもらっているだけでいい？あの人たちとおんなじ2年4組の子でしょ？できないなんて悔しいから、みんなだけで劇を考えてみない？みんなでCグループを作ってみない？先生は、きっとAやBと同じようにできると思うんだよ」と投げ掛けた。そうしたら、「うん。頑張ってみる」という反応が得られ、同じような仲間が集まった安心感、自分たちも何とか考えなくては行けないという思いが少しずつ生まれ、全員が話し合いに参加して劇が作られていった。その練習の様子を見て「すごいよね。よく考えたよね。AにもBにも負けないくらいうまい。90点あげるよ。本番では100点にしてね」とほめて、励ました。そのときのCグループの子どもたちは本当にうれしそうで、25年たった今でも一人ずつの顔が浮かぶ。特にある男児は、学習も得意ではなく、「90点」という言葉に喜んで、「90点、90点、ばんざい」と廊下を走り回った。この子どもは、本番が終わった後で「先生、ほくうまくできたよ。自信持ってやったらうまくできたの」と満面の笑みで報告しにきた。Cグループを編成しなかったら、自分で作り上げたという思いで喜んだり自信が生まれたりしたのだろうか。力の劣る子に援助の手を差し伸べることが、必ずしも指導上の配慮とは思わない。時には突き放すことで伸びる芽もあるということを実感した。Cグループの子たちはこの活動によって、自分たちが思い願ったことを

自分たちの手で実現できたので、自分自身の中に眠っていた力に新たに気付くことができた。

先の男児は3年生になった新しい学級で学級委員になった。立候補の挨拶に「ぼくはお勉強があまりできません。お話しするのも苦手です。でも、どんな大変なことでも頑張ってやり通す自信があります。だから、学級委員になったらクラスのために頑張れます」と言ったという。3年生4クラスで8人の学級委員が誕生したが、その中の6人がCグループの子どもたちだった。

活動が子どもを育てて、育った子どもたちがまた新たな活動を生み出した。子どもの思いや願いは、「夢や希望であり、実現への期待感を伴った考え」である。そして、それは、子供にとって「してみたいこと、せずにはいられないこと」である。子供は、自分の思いや願いを実現しようとするとき、驚くほど自発的・自主的に行動する。また自分の能力を最大限に発揮しようとする。そして自己実現への過程を通して、成就感や満足感を実感し、より一層、新しい課題に取り組むようになる。」(市村和子「一生活科から総合的な学習の時間へー生活科からのアピール」埼玉教育2000年2月号)

子どもの思いや願いを生かす授業づくりのポイントは、「ア対象との魅力的な出会いを作る」「イ思いや願いを持続させる」「ウ身近な地域素材を教材化する」「エ教師と子供の「思いや願い」のずれに柔軟に対応する」ことである。特に悩んだのが「エ」で、教師の思いと子どもの思いや願いにずれが生じた場合には、「指導計画の変更は、指導のねらいを、子供が自分のこととして受けとめるための柔軟な処置であると心得て、対応する」(前掲)ことが必須である。例えば「冬を楽しくすごそう」という単元で、市村学級は豆まきを行ったが、別クラスでは七草粥やお正月遊びをテーマに展開された例がある。

6. 生活科の趣旨を国語科に生かす

1994年に文部省から「生活科の趣旨を他教科領

域にも生かした学習指導のあり方」の研究委嘱を受けた際に研究主任となり、「生活科の趣旨を5年生で生かし、子どもの思いや願いを生かして国語の授業を計画した」提案を国語の単元「わらぐつの中の神様」で行った。

1人ひとりの児童が自分の思いや願いを基に自ら取り組みたい課題を作って、その課題解決のための学習を展開するとしたら、学習活動を複線型にするしかないだろう。教師が1つの方向に1つの事を教えることに全員が満足するはずはなく、34人いれば34通りの思いや願いがあるわけで、「その子どもたちの思いや願いを実現しつつ、5年生という段階で身に付けさせるべき国語の力も確実なものにしていくには、どんな授業を構成すればいいか」という提案であった。

まず、各児童が「一人学び」で自分の学習課題を持って、自分なりの学習方法を考えて計画を立てて学習し課題解決の糸口を見つける。そして、課題が解決したならば子どもたち同士で交流の場を作って、「私はおミツさんの人柄について考えたんですよ」とか、音読で読み取っていききたいという子は「方言のところにも気をつけて音読しますから、聞いてください」など交流する場を設ける。「お助けコーナー」には教師がおり、「一人学び」でつかえたとき、「先生どうしてもここが自力で解決ができません」と言った子を助ける。この方法は脚光を浴びたが、定着はしなかった。

もちろん、これは普遍化しにくい実践方法である。でも、本当に子どもの思いや願いを生かした国語の授業をやるとしたらこうだろう。そして、この方法を実現するためにTTが国語科でも有効にならないだろうか提案した。

7. 思いや願いを生かした学校経営

校長として子どもの思いや願いを生かした学校経営について、2014年1月3日の朝日新聞の第1面記事(「教育2014 暮らしのせいにしない 学校を拠点に立ち向かう」)に照らして思うところが

あった。この記事の学校は市村氏が最後に校長として勤めた学校とよく似ている。

勤務したのは、子どもたちが「もう何もかもいやだ、どうせできない」という学校だった。「自分なんかいなかったって誰もどうせ困らない」「どうせだめなやつが集まりだって町で思われているから」と言う子どもたちだった。実際に、在校児童のうち、塾に行っている子どももピアノを習っている子どもも習字を習っている子どももゼロで、格差社会の底辺を生きる子どもたちだった。高学年になって町の音楽会に学校代表で出るのに、ピアノの弾ける子がいないので養護教諭が伴奏して出る状況だった。

「だめだ、だめだ、だめだ、だめだ」と言われ続けた子どもたちの状況をどうしてもなんとかしたいと思い、「学校だけが頼りの子どもたちを育てるなんて、本当に教師冥利に尽きると私は思う。塾の力を借りないで県の平均点を超えよう」と職員に呼びかけて頑張った。相手にしたのは貧困と非行と低学力だった。小学校なのに警察で5時間も6時間も廊下にじっと座るような経験もした。でも、子どもたちの「自分たちだってできるようになりたい。おまえはいいやつだと言われたい」という思いや願いをかなえるための学校経営は幸せな経験で、記事掲載の学校に優るとも劣らぬ成果が上がったという。

子どもの思いや願いを生かすことを生活科に出会ってから考えてきたが、生活科に出会わなかったら1人ひとりの子どもを大事にすること、1人ひとりの思いや願いを生かすということ、子ども観、指導観、授業観はかつてのままだったかもしれない。

(文責：田澤 薫[たざわ・かおる] 聖学院大学児童学科教授)